

ジャージーを白衣に着替えたら、どこから見ても立派なお医者さん



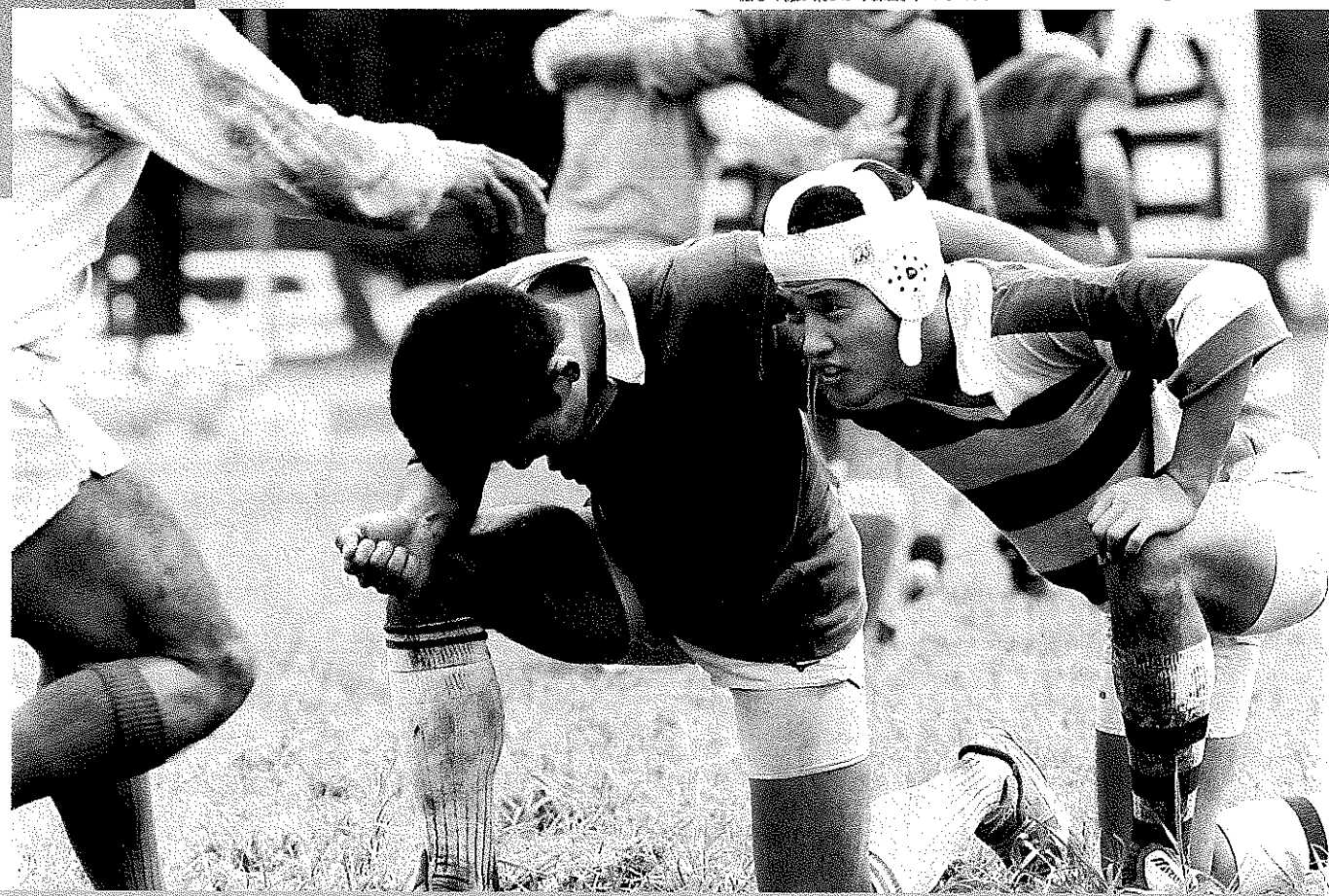
無垢な王者

「連覇」と聞くと釜石のV1、巨人軍のV9などを思い出すが、この世界でも勝ち続けるのは大変なこと。まして、毎年メンバーを入れ代わる学生ならなおのこと。ところがここに、10連覇を目前に控えたチームがある。自治医科大学。所属する関東医歯薬リーグで、向かうところ敵なしだ。また、トーナメント形式の東日本医科学学生体育大会でもすこぶる強く、夏の大会で11連覇を決めた。学校があるのは栃木県。最寄りの

駅は、JRの「自治医大」駅と書っている。各都道府県が学費を全額負担する代わりに、学生は卒業後、地元へ帰って9年間地域医療に従事する約束となっている。部員は全員、グラウンドの目の前にある寮に暮らしている。チームを彩るのは、鍛えぬいた鐵のような体を持った猛者ではない。小柄な、優しい目をした若者たちだ。派手さはないが堅実なプレーを持ち味に、記録を更新し続けている。「さぞや名選手がこの中に」と勘繰

りもできるが、34名いる部員の中で、ラグビー経験者は2名のみ。後は、この大学に入ってからラグビーを始めた。専任の指導者がいない学生主体の練習では、スクラムの押し合い、4人1組のランパスなど、基本的な練習に多くの時間を割く。飽きさせないように、練習メニューを工夫するの頭を痛める指導者が多い。この世に選手が自主的に、辛い単調な練習に取り組む姿は、清々しい。嫌々やっている。高校の合宿所と、高校生の自宅に分宿し、同じ練習をこなす。今年は幡鎌監督から新しいディフェンスを、高校生からBKのサインプレーを授けられた。また、強いチームに出掛けていった練習試合をするのも秋に向けての大事な準備だ。今年も法大、東大などに赴き、ジュニアチームと戦った。どの試合も「ポロポロにされた」（阿野主将）が、試合後に相手監督からアドバイスを頂けるからやめられない。医者の卵だけあって、ケガの処置も鮮やかな気がするがとっこい、気合いで直すそう。相手チームにケガ人がでて助けを求められても、処置に戸惑うことが多い。毎年夏合宿では、日射病で倒れる者がでる「医者の不養生」を地でいく世界だ。選手たちの多くは、「強いかからラグビー部に入った」と言う。ひたむきな初心者にとって、連覇へのプレッシャーは気負いではなく、誇りとして胸に潜む。

激しく機が飛びかう練習。「声がよく出るのがチームのカラーです」と阿野主将



選手が医学生なら、マネジャーは看護学生。ケガの手当ても心強い



チーム・オブ・ザ・マンス

TEAM OF THE MONTH 20

自治医科大学
医歯薬リーグ1部